和書門
類
二八四一一 號
一二四 函
一四 架
六〇 冊

内閣文庫
和書 類
二八四一一 號
六〇 冊
二一三 函
二〇 架

内閣文庫
番號 和 28411
冊數 60（43）
函號 212 277

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
colorchecker
x-rite
MSCCPPCC1214
MSCCPPPE1214
mm
x-rite

国立公文書館
National Archives of Japan

一話一言　巻之五十一目録

朝鮮信使列名

深川觀音所蔵不動尊画　相州多々

琉球人踊篠

仙臺萩注義

林谷酒述懐詩四首

白藤鈴木氏詩三首

孝子彦字

古文居

朝鮮陣以後日本通用始之事

筑前宗像阿弥陀経碑墨本跋　贋

古安鶴碑

放下著俳紀

蝦夷人唄

常御代譜

文化　年賀大孫詩　諸生

有栖川親王賀茂季鷹贈答狂歌

朝鮮信使列名

正使通政大夫吏曹参議知製教金履喬字公世号竹里甲申生四十八歳居京城

副使通訓大夫弘文館典翰知製教兼経筵侍読官春秋館論務官李勉求字子鈴号南霞丁丑生五十五歳居京城

上々官知中樞府事玄義洵字敬夫号坦々軒乙酉生歳四十七

大護軍玄烒字陽元号一遜壬午生五十歳

同知中樞府事崔首字明遠号菊斎戊子生四十四歳

上判事前判官卞文奎字玉汝号梅軒乙酉生四十

七歳
前主簿崔仁民字章叔号聴碧堂己丑生四十三歳
漢学上判事前正李俊龍字雲卿号蒼海丁卯生六
十九歳
押物判事副司猛趙行倫字明五号逸菴乙未生三
十歳
次上判事前主簿金祖慶字子祐号青蓮壬寅生　二十歳
前判官洪得俊字仲偉号徠園乙未生三十七歳
製述官奉常寺僉正朴頤相字相之号大華戊子生
四十四歳
正使書記幼学金善臣字士偉号清山癸未生四十

九歳
副使書記通徳郎李明五字季良号泊翁壬午生
五十歳
医員生徒金鎮周字汝安号活元府丁亥生四十
五歳
副司勇朴景都字聖揮号従王所戊子生四十四歳
写字官護軍皮宗鼎字士重号東崗癸未生四十
九歳
画員副司果李義菴字爾信号信園戊子生四十
四歳

右文化八年韓使来聘對馬時一行姓名也

一 深川元番所町上総屋といふ烟草屋あり 杉風の子孫也
芭蕉翁よりの譲状師の書画等所持して居る

立軸 絹地

蒲の葉の
押へて
みを
そり
清水の

惣徳代

はせを

□ 杉風
□ 風
印 印

横軸 紙地

芭蕉門葉ハ其外も多し 罷有の
芭蕉をして しる
つきし勝分ある 下河原むす

幸宮

しも鳥は沼のうへ也
いとゞ花降山鐘の響も
の花のさ枯ゆつる林かな
松をしもえ寒かりけり

鏡台はつらつらみやこへ
その雨
まさよ
（桃）
伊よ

其角
讃

月雪花のさまをいはし
そのまゝ
まさよ

七味は
まだし
めぐらす
頭をしめ

翁
讃
画題風也

立軸
元禄九丙子歳秋九月

掛軸
竹翁
白字

右軸 紙 寄合

白字不詳

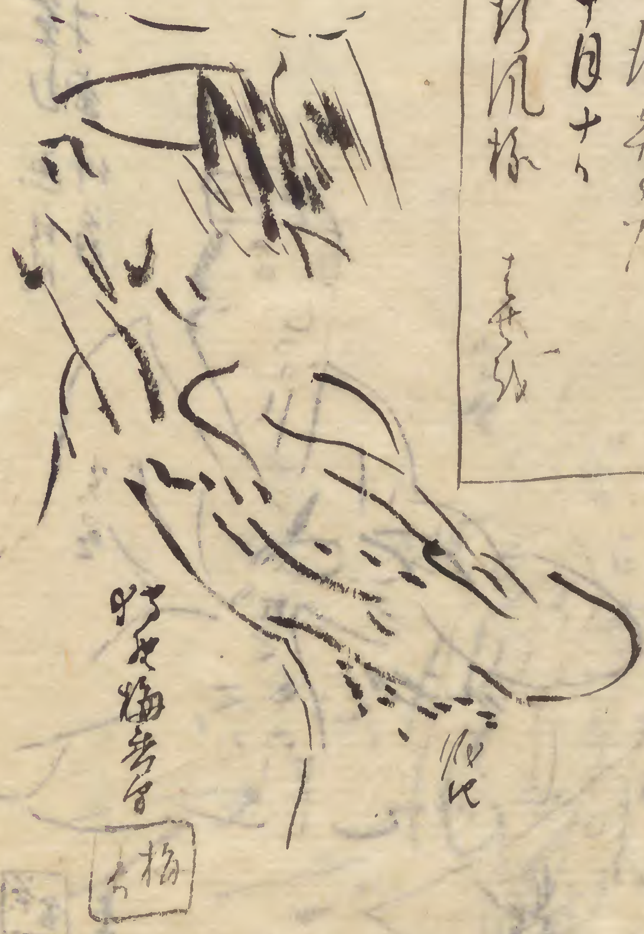
瓢銘　芭蕉庵家蔵

一瓢重泰山
自笑穪箕山
勿慣首陽山
遠中飯顆山

貞享三仲秋後二日

素堂山子書

我思古人 白字



[illegible]

横軸 紙

コレハ芭蕉ノ紙ノ[illegible] [illegible]

押絵

たゞ烟やせつ子橘ねくれさしやし
菜烟りもえてわするすめる
もふあそふあらそひてなすり
ちよやうまでもえも
あまり早く鳴りこころびにそうろ
ひきさてもつるみゆるのどく
よ知以

三軸　短冊五枚　八り一也

第三　元日や枕頭へむさし紀　秋の暮　桃青

元禄箕肩

餅を夢ニおりむすぶ歯朶の草枕　蕉桃青

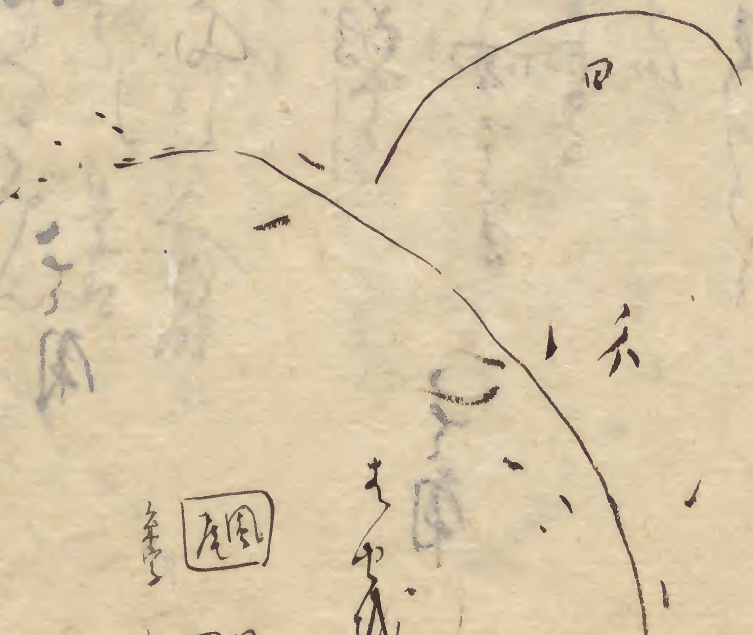
詩やうかゞふ佗しき春　其角

いむこうきうたのうちわすれの春

からうまきしや池の初かれ

三軸　寄軸

あかゝと日はつれなくも秋の風



はせを

園　風羅坊

横軸

秋風指　之角

祝　高山

あまうや尚ゆ時

孫書　四十五　之角

かしししか

大名あのりし

竹院借ゆる

つらかしし井たしまゆる

あるゝものかれ

まきりこそのちや

三代民ふ津くの人常雅

四人のゑ亮とえし其る

秋ゆ恩られ色せんとし

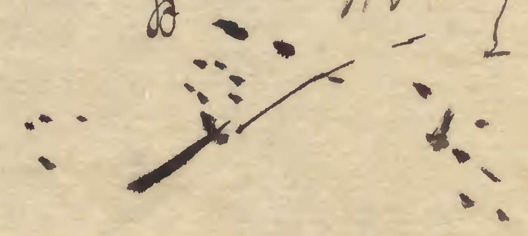
横軸　許六画　俳諧

元禄二の文月七日の頃　風雅に遊
加賀の国の山中にひとゝまる　庵
静に樗櫟を流し　一葉瓢を見るに
宗匠二年も旅路をくらし
なを命もうらしく　松のなかに
猶有ましと様々の事に所作を
過眼の少時も旅を以て指節とす
よりて此二句　探く　当季の
心をとゞく　言葉よりす
いまうかう

芭蕉

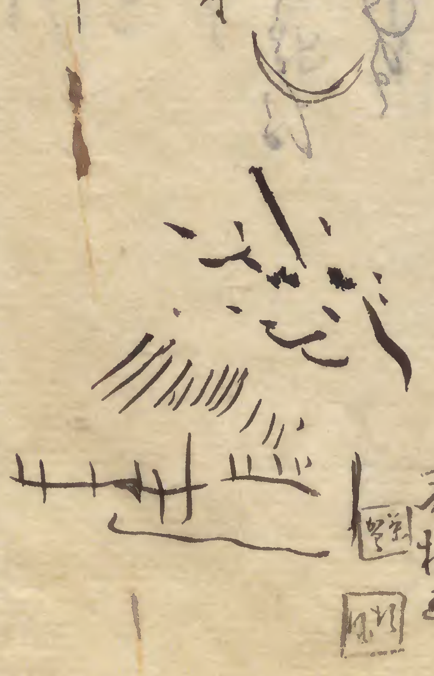
青水丹岸も旅寝や岩の上　松風

奇にけるこにのとしらと行し　亀翁



立軸　紙地
松風画　宗匠賛

寺くゝし
この月見よりや　京峯
藤原郎



素杖画

楊梅

萩にや見てさらむ
日も国とおもふはま
桜吉兆也とて
待しかれ つまし
嵯峨乃日迎林下
たゝらは無心相 こす
つれ衣をそ 此御
故郷の主悲他

花の咲かしくいつはり
村夕人の田中 秋節
何とも花さす 免かる
ちゃうちんなき 供給
此夜乃日 いざ路
深川の連衆なる也
中宿朝望し いとまし
先なる 旧功也
しらまぎ 花よし
すしこ夢し 施無上
真新は けしやうな さくら

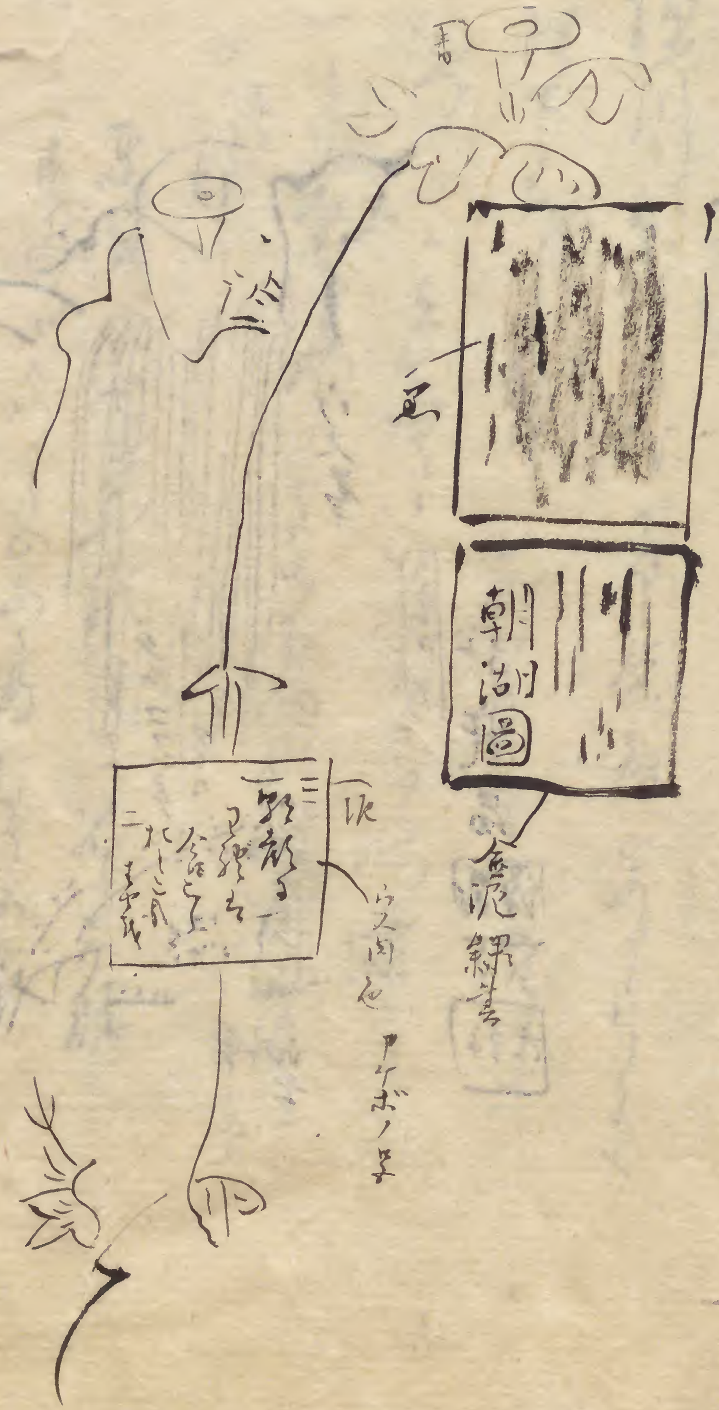
百ゟ五六拾目迄も
此度ノ分ハ此方へ
ハ分只差上候
先ハ右之段早々
申上候以上
正月十八日
お寿

挽風坊

立軸
唐紙

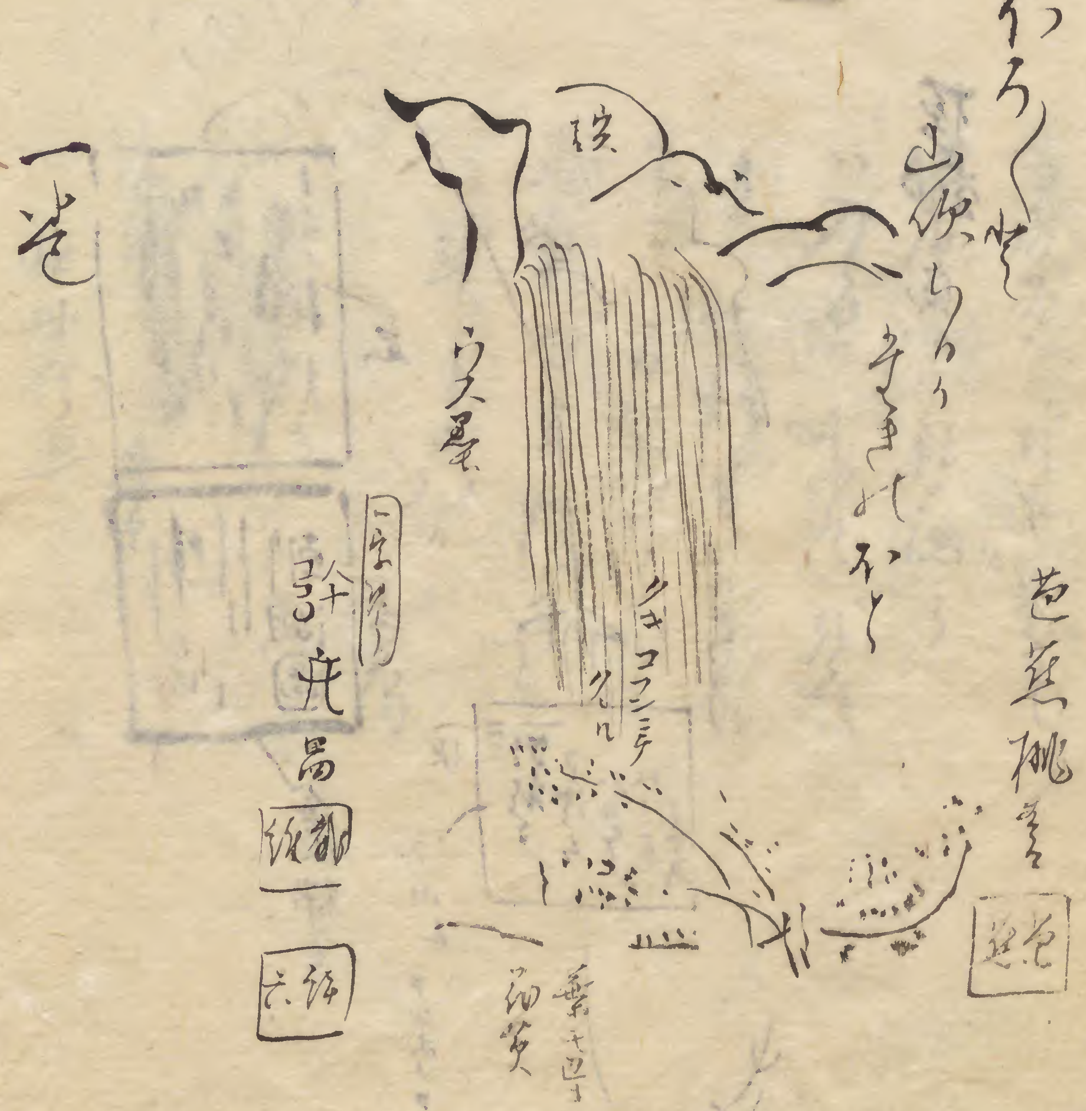
牡丹彩画

横軸
紙地　絲六画



深川にかくれたる草庵のあるしをとふて
隅田よりちかより秋夜のなかめを心に侍り
いつくの月もしいふなる六条あり
一方に雲の中より雨ふりて河角田川
の景色

東路のやまふかく宿を取
あみなかしのあるなかめを
也枝をうつし宮とこらって
まさし川あさしの枝をとらせいちひさき
舟に竿さしやあさ草川との行けるに
岸ちかく舟をとめて見るに脚ふみ川よ



八くつふけにたりて此座の古き艶ある身
に頼せよわさるゝ已たましく梅の風呂に
しのはれてかゝりふりしを　あをきあつりほとは
むらまなふれし流る秋の水　野川
川つらにみけなからく流に人浮り
志ら堺す　此浦はなれしひて身
此奥にさらつなをとりて
夜酒みさ飲よ　うち毎を　訪のまゝや　友也
川背を兄弟は山里の岸竈のしらく
折ふしつくりても尻をここめて焼そる蛤
こちのおりろうさらまりけれと

尻焼りありは常にまし適の楼　浴波
同しの支障に此まてちゃに屋ん凪
性なれあしってこれれは
焼ぬまは緑やいとち毎て志る凪　枝風
舟こしのあん税海まり出寝より
こふうらし実り　大饒の名より　西風
ゑ風秋前年知しのつうりおと歳花也
てりつしと毎海実れは　さ流るの
あん前を斯し出始め　冒西西船に
家あんれしいう也花てうちうり人
屋しと見へて人あまり　てうまつて武士
来りてまり切りて無船に岸のうりて

ふるかのみにけのせぬとまくみあく
はなくまでそのうすゝ人大路まして
瀬川のや流れ[illegible]わする川せまでも
ならひてあやしくみえけるも
吹よせてあるの舟に秋の風　宣
瀬田まはれなる[illegible]まひまさしやれて
あり中[illegible]とうちさちしのはなあかる色
くしけて見る[illegible]の[illegible]なりまる
名はあとは[illegible]毎に花あるしたく　今
中[illegible]ひて[illegible]はひかりあふれし
[illegible]のきをもちちあつれ

ほしきうしなくさを世をこし給
ちかずのあらわとおもわれみて
華のとたのしみやあるべし
なくさみは[illegible]中に[illegible]との木様
一ある色さかりまであなる[illegible]つまのま
うるやあいしやあ[illegible]まきのし
しるひぬれ
まをうけてあらそ[illegible]し花木植　公世
[illegible]師のしひけれはあれに田を刈給の
あやましてつかうまつりしけてみなと[illegible]を嗜
つきひまちかくもりてみなみに[illegible]の[illegible]
いつ[illegible]とみえて[illegible]見なりくらしつゝけよ

庭からありきた

蒔捨てかゝる千種をさき出し　道悦

苅田よりらかりまさも見えて

當婦より花穂をひろふ田面かな　友五

稲かりしなし家田人の田はしまあを

うらは哉

刈なすりいまは稲の実入り相　好児

脇やゝらひて酒をたく出て家みまいり

佛前おりて讃岐にまゐりられは柿の

賴にあさかどうけて眠るの子

誘ふにあるかいけてあるれは

ますや夕の渡しかゝるは露でさえし

りをよぶ奉橋のあたり藻刈舟せまりし

この舟の影しうつし名月をかげ

するもありけりかいつまる舟の面あり

りをまかれりひて

縁の色て二三舟えんりの路らゝ舟

行らしはまゝみるる月の出る花見て

五句付 茶の口と云ふとふ花を

なまひをもとおそていとも中き而と玉

まらりは思よ気してりのらし待らし

あのし あまれなり　之は破清女

ふしまひの影よみよむら

ゆかりうも八重むくらは殿村よりも
おもひいて草の戸を譲りて
此の庵にかへし置てさりぬ　乞
元禄二仲秋初五

世のさかり　芭蕉庵のこゝろさし
ちる中やかのもとつかれしは　去来
花ゝ下
いつめつきれぬや　嵐のしゝのあらし

芭蕉庵旅泊
まつ薪擔の人にかへし　示為
折〳〵はかりそめ宿の月ら
ちるのおもひはてのよしく
月まで
こゝに何よりまし旅の月　月来
あきはて
つきさかし草の露深の雨宿　宗波

此後蕉白くれし

貞享丁卯仲秋

このもし　一巻

素堂 （印）

みのむしの
ねをきゝにこよ
草の庵

ばせを

貞享第四　八録

丁卯　蜉遊書

貴無為士 （印）

共て芭蕉庵桃青の謹書ス

跋

みちのへのむしくすハてまくられけり

此歌は蓑虫をつくりて聞かさりぬ

みのむしのこしかたまつのむし哉

飛頭獠

飛頭獠ハ頭將飛先一日頸有痕而如紅縷（一本作綫）及夜
状如病頭忽飛去須臾飛還其腹自實其覺如夢雖
獠不知也予嘗入石抱山間中偶（一本無偶字）見二頭一
食蠏一食蚓見人驚起食蚓者尚銜蚓而飛蚓長尺
許雙再習ハ如飛鳥之使翼也獠俗賤之不與婚娶
（一本作嫁谷）欲絶其類予按占城有尸頭蠻奉婦人目無瞳
子飛頭食童子糞糞盡童子斃　婦目益明堪與此
獠為婚一笑　知不足齋叢書　赤雅

南方有落頭民其頭能飛以耳為翼将曉還復着體
呉時往々得此人也 十博物志 太平廣記四百八十二

仙臺秋演義零本

只聽得簌々的也響処跳出一隻如家犬一般黄鼠口
銜一個慎子地地待要望外面跳将去只見階下閃
出一個年少好漢怎生打扮但見
着一領罷熊二䌷上下斉一幅棋向為紋衣裳々身
長力壯膽大心廣手裡提将晃々里漆鉄骨扇一
枝腰間跨着樂大春氷雁領双三口鉄骨扇要打

幾許多腦袋瓜領刀可斷數十個頭顱名聞室町
男之助声振江都團十郎
那年少好漢生得隈眼大耳腰濶十圍威風凛々相
貌堂々八尺長短身材二十四五年紀他是源頼兼
公部下心腹的徒士一身好武藝有萬夫不當之勇
江湖上都喚他叫做荒獅子姓男雙名之助大喝一
声道俺碭來緣爲讒人阬陷退去在家頃聞府中歹
人縱横鶴公主身上少伏侍的人俺懐着鬼胎放心
不下憂得苦了夜間墻々地來階前保護碭的大驚

小恠那畜生在這里探頭探腦兒口中銜得一幀必
有緣故吃俺祖傳七代鐵扇龍就勢劈將來那大鼠
亦不尋柴右躲左閃男之助肚裡尋思道果然是恠
物非同小可抖擻精神盡平生氣力只一扇從半空
中劈下來向大鼠額上一下即大鼠被男之助一
扇打化倒翻了忽見一道濃烟滚將起来黒暗々罩
了庭上濃烟散処現出一個大漢雙手捏訣口中念
念有詞男之助吃了一驚定睛看時那大漢怎
生模樣但見

隆準深目長面口方額上陰々露出廐唇口中念
念誦來咒詛滿腹藏機陥阬繊個正士端人中心
瞞算結火許多才從無黨名馳八百行衢街氣撿
五十坐州郡奸雄家光稱彈正絶伎俳優仰鄙弁
那大漢衝這一頓在口向外面走去了男之助慌忙
吽迎亢那攔鳥休走向前待要揪提那大漢右手起
処呵呀一声一口銃劍飛將男之助面川來說時遲
那時快却好男之助年賤高強眼明手快霍地一閃
把那銃劍只一綽綽在手裡看一看時那漢呵々大
笑拽開脚步大踏步向那里走了不知去向有分教
詔堂上蹀血忠良奸邪判然公案前呈書巫蠱計策
露了方是從來無計施何益終使忠賢到底榮畢竟
男之助見了的是甚人且聽下回分解

白藤庵主戲撰

優曇華物演義第○四回終

毎値暇餘来駐車一園秋色望中賒西風已落淮南
葉细雨纔開彭沢花為奉罷田思趨殿閤難抛簪紱臥
煙霞世间多少男兒業要及鬢邊猶未華
風笠烟簑被一時何圖中道変塵羈年光荏苒芙蓉
花霜信年年鳴雁馳撫柳乃思宦武歎感秋偶福退
之詩此身定被沙鷗笑尚着前呵到水湄
秋暮遊相忘園擴懷作　蕉軒　林公鑑
壬戌孟冬廿有四日　棕堂書　大溪山人
阿部正精子純氏

擡盡帳帷鉤畫簷屋堂廡谿納林嵐風明看一鳥捐
去入自南窓出北窓
半窓梧影葉交加　蝴蝶夢醒西日斜　睡起渾身無氣
力呼童目指流多花
夏日從筆　二首　述齋

杏園集已夜迎聲妓阿勝勝有盛名噪于一時
家住駿河街
金樽會客駿河臺有妓駿河街上來呂海鮮鱗抽錦
縷臺田新釀入寶杯知迎粉黛人皆醉方是歡叢獨
忘魁者使媒妁論價賣各珠十斛毋如灰
鈴木蒼

元日早朝二首

數枝桃李秋門陰陪宴旦飲　恩澤深嶺闕千尋聳籠雲親軍八萬簇如林　氏知青葉凌霜色　国氏 李平章
表紅花向日心　寰韓服讃省從班同獻壽恥無一語比南金

城頭初日報春温近千衢衕車馬喧白雪呈祥新霽色蒼松偃蓋宛蟠根半生素職恥尸位一服青袍是主恩堪笑遷論難究俗退朝同拜五侯門

鈴木菘一

孝子の子をしむる　歴代編覧

系図には七八世の女子の子をとらしむるあり　七世の

あのは永禄年中のことなり　世の帳には今茲

以前のものとなり　世代　西土にも十世にて娘とよ

まで史にとらるべしのよ　七八世の例はいまた

あらず

筒井記云　永禄七年　六角桃井は国七世ノ少女孫子

足に天下の帳なりとなり　七世の一女子

ここ実子見セシムルの筆　是ニテ之ヲ知ル識語アリ

下総国かとり郡　篠代常忠兵衛といふ者ありしハ
常陸国筑波郡城中村忠兵衛といふものゝ男子にて
其母ハ常不る城言といふものゝ娘ハこれ吉治郎女
なりしが　かのをとめあハせたりしかば　ほどなく女子をうみ名を
やいといふとや　其年の秋より日ましに父母
病ありしかば医療をかりつくせども　其かひなく
ことし文化九年正月より同じく四月のはじめより
姫娘のていたらくなるはかなき事なるにより　或ハ医師
の修業をうけ　或ハ陰陽者の占トにしたがひけるとぞ

其ほどは常なりしとは男子となりしもあり月
重なりに随ひ腹部ふくれて九月頃より腹中に緒あり
一　其夜痛ありしに此暁男子をうめり　臍緒乳
けむし　其身長さ二尺五寸　南総住人　にはとまの
ありしものとや　八十四日ばかりの後にみえ　臍に
疑ひなく　所在小女子あり　乳房ハ大人の
如し　小児ハ後にみへて生まれ出て　産科なりといふ
父ハ何のなりしといふ　筆なりしまでなり
甫中ゐて　此趣筆記御奉行所　御役人　十歳後　生見

而悦之 周僖年逆子姤

十二歳未満にあり

十二歳未満にて産せしといへハ甚見え難き事なり

四倍の四歳の女子十二にして男子を産す事も

而後子 此謙子生醍醐天皇之使為男児

なり 西土にも例あり 鰥耕 緑毛 本西云益元

丁丑民間謠言 揚州 奎男女 作故嫁娶而閏

出納而訛論者云年江蘇遣御時為之限

使 廿女年十二 發 里人 浦仲明之子 爲婿

明年廿一子 注貞曰十二歳にて嫁して明の子を産む事あり 按ノ時ハ十三歳にして産せしもあり

十二歳にしてまて子ありけり

其より十二歳にして子ありけるを産む此十二歳未

の此時皇子誕あり 仲山ノ比十二歳にて出時皇子

懐妊相生之後誕あり 西土にも例あり 陔餘叢考

巻四十四 晋惠帝崩時年僅二十七 其子成帝

亨國七年年二十二 則明帝生成帝時年僅十

十三耳 北魏獻文帝亦十二歳生 孝文帝と

みへたり 又曰 北齊 琅琊王儼被害時年十四

已上四冊とこれハうのうしめてもまれし　于忠宗

のみとりしる　洋行て後

日本史亀山帝后妃傳云帝昇姫内年十三

始生子

鳩巣小説云頃日　皇子御誕生ニ付　主上今年

御十四歳ニテ実母ハ十七歳ト申候忍　異事

御十三ニテノ御子ト申モノハ此外ニ尚有間　正徳四年

江戸ヘ日　主上ハ中御門院ナリ此皇子ハイカナラセ

玉ヒシヤ　德川通鑑ニ所見ナシ

筆をおさむる時の忠づくかんのよのハ此年十七まで

よあかしますまますハ十三にそれハしやまするいみ

しらぬやまきハみよの此書うしひみおりしもん　江戸

日本史ハ後光明院りかんのよめハ此堂の女妹子

あり後光明年　前申伺のまよあり　元文いよあき

此帯候

あり

重寛目書於唐

すかり

巳十一月二日　[illegible]海

覚之[illegible]

吉良上野介

萩原近江守[illegible]

上坂春日之代

巳二(?)[illegible]

我等(?)[illegible]

[illegible]

[illegible]

元禄二己巳年

十月廿九日(?)

吉良上野介
（花押）

大久保加賀守様
阿部豊後守様
戸田山城守様
土屋相模守様

大加賀守様
阿豊後守様
戸山城守様
土相模守様

浅野内匠頭

覚

浅野大学
辰三十四歳

大学儀当辰三十四ニ罷成候 未年 御目見仕候
松平内記殿御支配ニ而 御目見仕候 寄合相勤候
大目付土屋右京亮大学相続之儀 願之通被 仰付候
被仰付候 大学相続願出候

辰七月十九日

浅野内匠頭
長矩

大久保加賀守様

阿部豊後守殿
戸田山城守殿
土屋相模守殿

朝鮮陣以後日本与通用始之事

秀頼公幼少朝鮮出陣七年目ニ太閤薨去ニ付朝鮮及
國迄引取候慶長六年丑年對馬守宗義智
権現様御國ゟ[illegible]朝鮮和睦之儀[illegible]
[illegible]無是御意[illegible]
不申[illegible]和睦之儀[illegible]朝鮮國
ゟ[illegible]御家[illegible]對
之[illegible]御[illegible]
之[illegible]對州[illegible]

次ニ御書ヲ添テ候 大御所ヘ文ヲ捧ケ奉ル 御機嫌ヲ
御請 若殿ヘモ同断 右ニ付 討テ下サレ候 其外
御使ヲ以テ申候 頗ル贈リ遣シ色々多分 申付
其外ニ薬種 衣類多ク記シ 家人民ヲ相ヒ 相副
陣中 討スル 先ヅ其後ニ 御國ヘ 近年ハ 城崩レ
朝鮮 其ノ國ハ 迷惑 總ニ付 萬事大概ニ 宇治
之ハ 殊ニ変 経候中 一切 御代替リ 実ト
前後 其後ハ 使者 来リ 殊ニ 取付 上意
一乱ニ付 御國ヘ 捕来 朝鮮人 数百人 数多 送返シ

珎 薩摩ヘ捕居候 朝鮮 其外ノ 諸人
返被下候 将軍 家ヘ 書簡 差出 無異 再国
亦 今後 誠意 通ジ 國ニ 今更 将軍
御代 目出度 御継目 御使 差 其中 供ノ
中山 書簡 使者 色々 遣 大御所ニ 候
候 其中 振舞 取 九年 早 秋
大師 文 或ハ 中 若殿 乙巳
先 日 仕 中 将 使者 御様 御目見ヘ
其外 此 先 和 其 後

別而彼致調候 大ニ取申造り申ニ 丁未年ニ彼
呉位君 慶 運了好寛被法 給御座候旨 江戸ニ
至識 台徳院様 被 仰出候而 被附於珍蔵
拝領被仰付候 此時 ニ而 海 未調候千今
未者替 西国 仕候
此度 南国和文 未調 出来無 御座候 仕候
随而 寛文 被成 仕候国 只今 共
此節 ニ而 一 仕 御座候 早々

七月十八日 宗對馬守

西人記我船載萬安橋碑去今莫知所在獨有
筑前宗像彌陀經碑儀在東審来由或傳彼寄
平内府者其為宋人書則無疑已湮没海國之
久墨泐漫漶殊為可恨既有脩建者搨本亦稍〻
出其初藩不甚靳重逮於近歳禁護頗嚴非有
司監視則不許打搨是以遍為難得之寳矣余
尚在佐嘉地與筑鄰一日半行可達宗像而搨
本竟不可得三年前筑侯延余談經因乞得之

椿亭祇役對島經由筑封嶋有司亦得之使余
題言余與椿亭始不相謀各自祈懇而其得之
則在同時乃書其所以得初易而後難以詒覽
者并使来裔保愛
文化甲戌榴月精里樸

泉州萬安橋俗名雒陽在迎恩門東二十里長江限之
橋踰數千尺宋蔡忠惠公所造泉郡橋之鉅與万安埒
與要之者可三四數而四方之人與泉人獨好言万安
其言往々多愚以謂撰時揆日書基所同鉄址所乏皆
須檄江水之神而得吉如世俗所傳醋字者至于鑿石
伐木激浪以漲舟懸機以弓締毎有危險神則来相址
石所采蠣蝦封之而公自為記及舊泉誌中皆無是地
公所記寥々百十言但記時日與所費工貲耳亦無折
鋪張四百餘年来後人尚復侈大其事托于神而美之

當時固視之漠然與尋常與梁等古人信不可及哉橋
盡爲公祠而田午過其地拜公祠下見公所書二碑無
額無禊製殊古樸立公像左右相傳倭變時倭舟識其
右一碑去後人補之今官此地者預使人搨碑郡人悍
遠途又崇者多乃別爲木本以應泉州僞搨不止銀鋌
淳化也
右周櫟園撰閩日記

紀下總條來咏記
抑按下總鞘筑後國柳川江月院崇源寺洞元
あり同國寺田主家臣の庭前に自然に舟ニ如
生しく九年にて縁より出るに菩洞主家臣給等
しく庭前の二本を寛文に讃宮して云 此年為
又八々西寄筒あり人とりて印時に但馬伍筒笛と
稱するを給ふ菩洞尼禪師古木二管とも飛より一管は
江月院に留大一管は主家臣に授りて後の菩
洞此一管を御請取られ玉ひ宝多ミ子多年給て名
に擬す古の笛管とよひ然錦ばの自然に妙なるを安
けるに依て是の管ら取て給て龍吟の人能多々て

授す事なりしか實に同江しとる事は宗源深く
鮮縁授ちを若伺言顔を同江流宗よりし代々の脈
て候に從亦く奔走し法臨にて自信者也人
とりわけ探り法華に絶ち若狭々此井を修で
ありと聴求む同江此浄なを受く乎かすり皆別
自ら善海となり述て同江法を皆の本唯
瞭まりけ浅説も善海を敬ひ同江湛中よ
羅を受る法にて以法界を服し欲く彼以綱を
統の漢流より関江承持の笠様にて是を迎え
鮮也く善海も此外の妙ゝを蔵して法破
以て脱け法界なれは善海もふ面に至へき事

此ノ頃ニ不返枝代ゝ善海寺の寳筐と成りしに
同寺何ゝの住職出て宗件ハ是の由の由ヲ
此井并筆跡此寺の妙吉を蔵して有る流れ
ましも寄り不許不在近年賴恩倩みて
善海寺も又宗件其の熱心の深きを感しこれを受
ますゝ流しに加へ給ひしと云ゝ事寳御して己年と済
於これら善海寺へ入寄附せられ宗件の源を
以り其筋ケ様にも其由を湊の書付以て善海寺に
度々是の善海寺へ深く給ふ事ありて東都に下らし
是御本御の恩をかうむりありしも恩を謝し
一筆を讓りし此井を得て此義書に付する古

ハ、の好愛なり、ききゆえにして此事を先祖の遺法
と存、尺八を以て法燈を挑くべきもの也

鄭嶽山鈴法寺現住嘯山

于時宝暦十一巳五月吉日　雷嵐

許可状授与之事

許可状者多年執心之上出時ニ披露補紀
之雖為尺八道業不絶之門人被為
授与周旋取次之継業貫多年其業継之所
積實白梅子節愛明兵久継古風仍而如件

此一通授与尺八手之法雨宅無事者也

于時宝暦十三癸未歳十月日

鄭嶽山鈴法寺現住嘯山

雷嵐 □ □

白梅子

右許可状の尺八ハ市谷鈴所先末当寺付物也

ユウカラ

兄妹一所ニ山ノ上ニ住ム
コビトレシトラノヌフリカシケ子ヲカイ

兄妹、水別ニ有我飲
ユヒイクワッカシンナイアンテウカイイク

水モ別ニ有銀水金
ワッカシンナイアンシロク子ワッカヌンリ子

水一日我呑水無
ワッカシ子トテウカイイクワッフイシヤニ

センカタナシ　ナイト思ニ　シニ　涌
ヤイフメユモアニクイユフニナホロシノアン
飲食　胎　子　生　見　腹　立
イタハホニコロホンジヨヘトクユヒキシクカラ
我ヲ　縄ニテ　縛リ　山ノ　上ヘ　ヨリ
テウカイトシナマレスフリキリタイキヲロワノ
博ニ　落ス　住　ナカラ　山　山　ノ　下ニ居
カラカリセクナシカ子ヌフリ子ヨロボキ仔
獣　多　来リ　化　物　多　来リ
ヨカイアルシヤシシカイマシホロシノアルキ

我　繋リ　モウケタル　ナリ
テウカイカルチマシデホニシヨダハシテ
我　妻
テウカイマナタハシナトシスカリ
ヤンカクナタ　逃ニ　義　住　来リ
ヤイフメコモキラシヤマイクルアルキ
我　契リ　モウケクル　子
テウカイカルワヲマシデポシシヨ
トト　父　我ト　一所ニ　来シト　家ヘ
タバシナテウガイトラノヲマシナセタ

ヲ一ンヤイニヤニヘヨイキタシコ、
（トモナウ　腹ヲ　立）

ホリケハアニ、シヤ一ノイクル、イルシカ
（藤テ　居　義　経　ナシノ訳）

イケシユイボンシヨトラノイケ
（ミテ　藤テ　居ルバト　子　トモニ　ツノ）

シユイ、シヨイタ、ヲ一、シアトイカシキ
（訳ヲ　聞ク　外ヘ　行トテ　海ノ　上ヘ）

ナヲ、マンヲン子、ワタラ、ホン、ワタラ、
（行キ　大　岩　小　岩ノ）

アトイノ、シケリ、ロシキハ、ヨカイ、スカリ
（海　中ニ　住　居ヲ　見テ）

ヤイシヤンベコノイキ、ナセタ、アリキホン
（腹ヲ　立　家ヘ　行キ　腹）

ケハバンテキ、ヲカイタ、子レハユビ、アルキ、
（立　藤テ　居ル　今　三年兄　来リ）

イタク子ハ、テウカイ、レバ、ウナシテ、
（云　我　三年　訖　言）

アイコナタ子、ビリカシヤ、一イクル、
（一　今　滅タリ　義　経）

アルキ（来ル）、ナキ（来タラ）イテツケ（必ス）ウエニ（ワロク）

バロシヤン（スルナ）ケタチ（今）ラムライケク（腹立ナヲリシト云）ミエ

リレヤラ足（帰れ）

ヲロワノユヒ、ナシヒニ（秋比ヨリ）タヲロワクシト（義）

イタルトラン（経 トモニ）ウルメクル（睡 姿）ホ゜ナイチシ（子 四人）

ヘトクタチ（生 今）ヘカエク（年寄）シユシヤニ（義）イタル（位）

ホナトトラ（子 二人 トモニ）コタシク（古にヘ）ヲニニ（ユキ）

テウカイク（戦 今）チヘカアエク（年寄）シエホヲ（子）

トニトラノ（二人 トモニ）コタシク（古にヘ）ナニヘカ（行）アエヤ（年寄）

イラメコモ（センカタガナイ）ホ゛ンシ（子）ヨウタレ（眷属）ナカ（此如）

ケタユタン（左ハワキヘ）シトツカ（スムダ）ニ

ヱムカラ唄ひ入る八丈人の唄なりこれを唄ふに
給ふ多に居く板井と成りきさまの声あり咽より出
て山伏比祭文世ことし 傳ふ君を知そめ
笑しれさり風情も見るあり日雨の時もにに心を
とめし中 国の揉りに甚姫疑れなるまされ
麦唄なれ共なりかつる深の事にも男女の道み
ちなる哉ききまとすけも妻らし廉の高く
庭花は来る夜の露 其の思ひに添はるまさ
うたふの気比揆かつくら方言と其の詞書を
見のたし

安永二巳年十月五日御誕生
御誕生
公方様
天明七未年四月十五日
内大臣 文化十三子年 右大臣

同年六月十八日
御誕生
御台様
近衛内大臣殿御養女
実ハ松平薩摩守重豪

寛政五丑年五月十四日
御誕生 同年十五日[illegible] 御名[illegible]
大納言様
文化十酉年 大将様
御簾中様
有栖川中務卿織仁親王
姫 楽宮 喬子 [illegible]

[illegible]
[illegible]

同八辰年六月十四日
御誕生　御名字ニ而ハ
御[?]宮中将
有栖川殿御息女

寛政元酉年三月廿五日
御誕生　清閑寺殿御中老
淑姫君様　[?]
元中老女
平塚伊賀守娘
中﨟[?]
中方

同十二申年壬四月廿日
御誕生
岩姫君様
小十人井上新十郎姪
梶之三郎娘
お中﨟[?]殿
享和二戌年六月[?]
文化
御[?]

享和元酉年九月九日
御誕生　清水九日
菊子代殿
御別
梶之三郎娘
同人

同三亥年十二月十八日
御誕生　文化[?]年六月十[?]日
浅姫君様
[?]
小普請[?]十郎
木村七兵衛娘
お[?]殿

同五丑年七月六日
御誕生
寿姫君様
小普請石川大隅守[?]
[?]
お[?]殿

同二巳年二月廿七日
御誕生
友松殿

同年七月十一日
御誕生
文姫君様

文化六巳年十二月四日
御誕生
保之丞殿

小普請松平縫殿頭支配
曽根熊吉娘
おてう方
浚明院様附

荒田(?)
お八百(?)方

小普請青山左近将監支配
大(?)伊(?)娘
お屋元方

文化七午年六月十三日
御誕生
要之丞殿

文化八未年三月十六日
御誕生
盛姫君様
文化九申年四月日御卒去

文化十酉年四月十三日
御誕生
和姫君様

曽根熊吉娘
おてう方

右同人娘(?)
お屋元方

おてう方

一

文化十三年三月廿八日御逝去
浴照院殿

文化十一戌年七月廿九日御逝去
瓊妙院殿

文化十三亥年六月廿五日御逝去
理照院殿

文化十二亥年八月十三日御逝去
久寿院殿

文化十二亥年十月廿六日御逝去
仲照光殿

文化十四丑年五月廿八日御誕生
信々院殿

中臈格之娘
お美代ノ方

太田實娘
お曽ノ方

小性格門
三木新右衛門娘
おいと之方

年寄
清水姫主水娘
おてふ方

中臈格之娘
おゆう方

青山家娘
お歌之方

御七夜前御逝去照名様
瓊岸院様
寛政十戌年十月朔日御誕生翌二日御逝去 浄量院
御内證御方

竹千代様
孝順院様
同四子年七月十三日御誕生同五丑年六月十二日御逝去 増上寺 法源院
御同人

竹千代様御産御方御姉
瑞正院様
同六寅年十月九日御誕生 同年十一月廿八日御逝去 清量院
お梅之方

寛政八年六月廿八日御誕生 淑姫様 尾張 中納言御室

二

殺之御腹
淨巌院殿
同七卯十二月十九日御誕生　同九巳年六月十五日御逝去　法名

小笠原右近將監忠雄[illegible]
於[illegible]様

縫殿之腹
清光院殿
同八辰年十月十五日御誕生　同九巳年四月廿日御逝去　法名
小笠原右近將監[illegible]
御[illegible]
於志乃様

三

縫殿之腹
[illegible]玉院殿
同八辰年七月十六日御誕生　同十五年六月[illegible]日御逝去
同九巳[illegible]御[illegible]
御内[illegible]

豊之御腹
良光院殿
同十年六月朔日御誕生　同年七月廿日御逝去　法名

御[illegible]
於[illegible]様

御[illegible]
豊之御腹
[illegible]院殿
同八[illegible]年六月[illegible]日御誕生　同十五年[illegible]月[illegible]日御逝去　法名
[illegible]

中[illegible]
[illegible]院殿
同十年[illegible]八月[illegible]日御誕生　同十五年[illegible]月[illegible]日御逝去

於利尾様

[illegible]

右姫君様
紫少将殿　　　相つけ候
同十年十一月廿三日　御誕生　同十一年正月廿五日
御逝去　清涼院殿
死
三十　右姫君様
唯心院殿　　　相つけ候
享和元年五月五日　御誕生　同年六月五日　御逝去
清雲院殿
清姫様　　　相方候
同七年二月十三日　御流産
蓮浄院殿

三十三　右姫君様
盛光院殿　　　相つけ候
同七年五月十一日　御誕生　同三年正月十日　御逝去　清涼院殿
三十四　右姫君様
寛字御殿　　　相つけ候
同三年十一月十五日　八十　御誕生　文政二年六月五日　御逝去
御法号
天潤院殿　　　相てけ候
同九年八月廿一日　御誕生　文化五年九月廿四日　御逝去　清雲院殿

晃之代様
清生院殿
文化三寅年二月廿一日出生　同七午年十月六日逝去
坊之丞
おちよの方
高麗寿姫様
岳琛院殿
同年三月廿日出生　同年七月廿六日逝去
御屋乃方
清雲院
晴姫君様
照燿院殿
文化二丑年十二月廿八日出生　同四卯年五月十六日
御逝去
清雲院代
御母七乃方

彭姫君様
清涼院殿
文化八未年正月廿六日御誕生　同年二月廿八日御逝去
清雲院
喜美姫
おちよの方
常姫君様
精純院殿
文化四卯年十二月十四日出生　同八未年七月九日
御簾中様
御簾中様
出産
孝姫君様
出産御逝去
清雲院
淳脱院殿
文化十酉年四月廿六日誕生　同十一戌年七月廿九日逝去
清雲院代
おちよの方
恵之丞様
常境院殿
文化十酉年十月三日出生　同十一戌年八月十六日逝去
御部屋様
清雲院
お屋乃方

御内證御方
於らく御方
お杉様
お前様
おゑん様
お利屋様
おませ様
おてつ様
お多残様
お梅ゝ様
御元ゝ様
お屋无様
おいと様
おかん殿

御乳人
御差人
御差人
御乳人
御差人
御乳人
御差人
御さし人
御乳人
御乳人
御ち人
御之人
御お人
御差人
御乳人

丙九
御産母様

竹千代君　文化十酉年十月廿五日生　同十一戌年八月十六日逝
玉樹院殿英山知月大童子
押田丹波守女　妙了
おみさ殿

達姫様　文化十一戌年九月廿五日

十七
儔姫様　文化十二亥年二月廿七日生
[illegible]　瑞芳院殿

御産母様

恭值篤生
大孫之鴻禧
徽合酉年
典犹習甲觀臣樸不勝忻躍之至
謹奉俚言一章上
千秋萬歳之壽
臣古賀樸頓首再拜
維熊應兆之日

文孫宇内同仰天覬繁
保業無疆迎祉福
貽謀不抜固碁根祥成蕊苗
胞胎異美似環瑜
儀表尊卑賀景雲彌數里公
侯玉帛擁
城門

恭遇篤生
大孫
少徽耀倍
幼海潤加臣利用無任抃躍之至
謹奉鄙章一篇上
千秋萬歳之壽
臣依田利用頓首再拜
甲觀祥開喜氣俱熊羆入

協靈圖
昌期寧假高祺詰
良月遐同聚井笄
色變長瀾河薦瑞
文流列宿電纏樞
遹知昊眷休徵萃
萬壽歡聲塞九衢

恭見
大孫如達之洪禧
麟鳳成祥
熊羆叡喜臣固不勝欣抃之至
謹識蕪言八句上
千秋萬歲之壽
臣增島固頓首再拜

離明廣運瑞休彰繞渚流虹協

參祥
銀榜晨騰佳氣欝
銅鑪暮望彩雲翔
莘詩何假三多祝
箕範預知五福昌
守邑十年基本固寰區舞躍喜
無疆

恭値
大孫降誕
明兩增輝
河清應運臣煜不勝歡抃之至
謹奉鄙待一章上
千秋萬歲之壽
臣古賀煜頓首再拜
堯母門前玄鳥翔香孫營

裏赤龍驤
青雲成蓋抵蘭殿
紫氣滿庭明書堂
不羨周南麟趾瑞
休論江左鳳毛祥繩
孫子承丕構料織卜年天共長

伏観
文孫如達之景福
流星呈瑞
彌月協良臣温不勝欣躍謹奉
巴里一篇上
千秋萬歳之壽
臣野村温頓首再拜
大
恭逹

季鷹写事 加茂山本甲斐権守

肯搆川[illegible]

季鷹まさかの前ゝ

[illegible]

[illegible]のみと

寿し歌としみこゝろあひて

[illegible]

・・大樹疏孫枝肯擁長羕

萬世基兆想熊羆符

昨夢禅傳龍鳳稟

英姿

守桃端是添蒼竹

享国何唯應紫芝欲徵堯封

三祝意敢陳周雅九如詞

けさせしの宿もさみしかれ
やま人那つとしらぬ花し
おれをこそまちにとりて
見をもつけきおはにつみ
くもゐも楝をとしみ一輪も

ふのくちをも名つはやらる
まつかすのほひめぬらし
むへちらもやもらるの宿をこひ
今さし
宿とはしみけれしかは
やまかみひはかしる
いめしぬやまね

是よりかゝり一泊
あつたの山と侍の
御かへし
手ふし之して
手習る
備ありれる圓七んる

長川にむかしは宮居となん
やき宮居まつりしと見え侍る
よりは神代より和つたへ
事なれはありかたき
いと尊き名所なるへし
まことに末の世まてつきせぬる

ものゝまことハましせる
語のしきかよへハ源氏と
さるよしを名付しも今
の世ハ色好の家ニよらせしと
名もかぬめとやらんのやから
あやしかなし人く見ひはれ之

もおもひあへ浪にをまよ
事一首ハかりなとしくさし
をよ讀まよみあやにくなし
なかハしもまでらハ聞えれ
とこたまてともらへまた昔世の
ゆかしれてもきかるを願ハしそ

詩のはしまりけると
なりひら今はなかみやまくし
しゝき神代にはしまり
あされすもなく深き心ありて
まつとやくし枕にのこれる今に
綿のなかし文字をかくしぬ

つかせ侍りける讃岐の御君
とも待遊されは
くへこし擬やまかけも
思をぬ物くれしを
妹しか爲やまみ
かくこらしわきもましとし

やる／＼とて給はせける君の筆
萬代もまきりしつくしや
ゆゝしく流るかつらのあく
さりへたりしやまん事に
ほうきゝもひつけ給へ
えられいくよあやかし

いく世見味うしやらん
君か代を我世まあとせ
いもちのよあやかるえの
なく人しらみく
菅くかまり

長[illegible]玉としいふ年の
みしる[illegible]つ[illegible]衛門いらし
らきれ[illegible]して[illegible]と
しつしられ
蘭花のまく
林のよして
[illegible]のみかと[illegible]のゆへにみるみ[illegible]きせうをうれ
大[illegible]しし
あけさせんつ[illegible]
しきんへ[illegible]けある。

国立公文書館
National Archives of Japan